

伊藤若冲「象と鯨図屏風図」



天才も 実体験が伴わないと . . .

動物画の天才、特にニワトリを描かせたら右に出るものはいなかったとされる伊藤若冲。

生れが青物問屋（青果問屋）であったことから、家の周囲には様々な問屋があったことでしょう。そんなことから、野菜や植物、動物に対する関心や観察力も幼少期の実体験が基になっているのだろつと言われてています。若冲の代表作「動植綵絵（どうしょくさいえ）」は、精密で写実的で、細部にまで行き届いた描写が特徴とされていますが、先人の絵を参考にして描いた絵には、若冲の絵の特徴を微塵も感じません。右の画像は、俵屋宗達の描いた「白象図」です。若冲はこの絵を参考にして描いたとされています。宗達の象にしても、実物を見て描いたのではなく、先人の絵を参考にしたのだろつと言われてています。想像力は大切ですが、実体験の必要性も感じますね。





根拠に基づく動物飼育

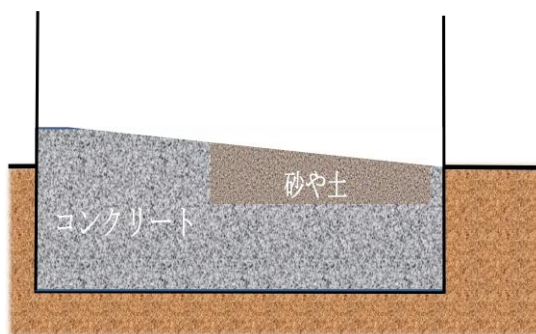
動物飼育の始め方：飼育舎の床の工夫

飼育舎の床は、以前に作られた飼育舎は必ず土間床でした。これは、飼育舎の存在理由を歴史的背景から紐解いてみると、飼育舎が理科学習の一環として設置されたため、動物の習性に見合った構造であることが求められていたからだと理解されます。

時代とともに、小学校での動物飼育の目的は動物の習性を観察することよりも、愛情を持って育てることに重きを置くようになりました。それに伴い、飼育舎に求められる構造は、飼育舎をより清潔に保てることを最優先する構造へと変化しました。

人間にとって管理しやすい飼育舎の床は、何といたってもコンクリートです。でも、動物にとって過ごしやすい床は土間でしょう。動物の習性を十分に理解し、より快適に過ごせる構造であることが大切です、その点を考慮するとコンクリートと土間の両方ある方がよいでしょう。

右図のように、コンクリートの一部に砂場を作ってあげるとよいでしょう。砂場の深さは、ニワトリなどの場合には5～10 cm位あれば十分です。



飼育舎の床の断面図

※砂場の底はコンクリートであることが重要です。トンネルを深く掘られないための対策です。

ウサギの場合は、砂場の深さは20～30 cm位あると充分です。砂場が深すぎるとトンネルも深くなり、ウサギが出てこなくなりますので、深すぎないことが重要です。砂場の中には、あらかじめ塩ビパイプを埋めておいてトンネルを準備しておいてあげるのもよいでしょう。（右図）

砂場の深さが浅い分、トンネルは崩れやすいので、不用意に砂場に立ち入らないように注意してください。

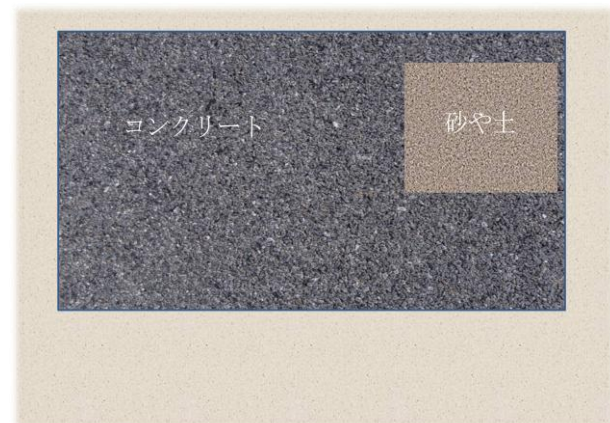


飼育舎の平面図

砂場の広さは、広ければ広いほど良いのですが、足休めや砂遊びができる程度の広さでも充分です。（右図）

動物の数にもよりますが、一頭当たり30 cm × 40 cm位を目安にするとよいでしょう。

もうすでにコンクリートになっている場合には、コンクリートに四角い木枠を置き、その木枠の中に砂や土を入れてあげるとよいでしょう。



飼育舎の平面図





私論抗論

動物飼育率と自殺率

先月の「みんなのがっこうのどうぶつ 第26号」で取り上げた、「家庭でのペットが、社交性と自尊心の成長の助けになる」の記事を、いくつかの統計的数字から考えてみようと思います。

民間調査会社（GFK Japan）の世界 22 カ国で実施したインターネット調査によると、日本の動物飼育率は低く、調査した 22 カ国中 20 位でした。下位をアジア 3 カ国（日本 20 位、韓国 21 位、台湾 22 位）が占めていました（[グローバルのペット飼育率調査](#)）。日本の飼育率は、GFK Japan の調査では、37%でしたが、日本ペットフード協会の調査（[平成 28 年（2016 年）全国犬猫飼育実態調査 結果](#)）では、24.4%でした。

一方、動物飼育率が高かったのは、アルゼンチン、メキシコ、ブラジルの南米三カ国で、その飼育率は、アルゼンチン 80%、メキシコ 80%、ブラジル 75%でした。



[WHO の OECD 加盟国での自殺率統計（2013 年）](#) では、韓国は 2 位、日本は 4 位、ブラジルは 28 位、メキシコは 30 位でした。WHO の 2006 年～2013 年までの統計の期間中、日本は上位 6 位以内に、韓国は上位 3 位以内で推移していました。

WHO の統計で注目すべきは 15～19 歳の自殺率です。日本の 15～19 歳の自殺率は、OECD 加盟 33 カ国の平均を 1990 年では下回っていたのですが、2002 年を境に、それ以降では平均を上回り、緩やかな増加傾向を示しています。15～19 歳の自殺率の OECD 加盟 33 カ国の平均は、1990 年から緩やかな減少傾向を示してきて、日本の傾向は全体の傾向と逆の傾向を示しています。ただし、日本の 15～19 歳の自殺率は、直近の 2013 年の統計では、2010 年よりも減少していますので、今後の傾向は次の統計の発表を待つ必要があります。2016 年 1 月に報道された [15～24 歳の自殺率に関する President Online の記事](#) によると、15～24 歳の自殺率は、日本が 1 位、韓国が 2 位で非常に高いことが示されました。この記事も気になるところです。

自尊感情や自己肯定的な考えは、勉強のように知識として教えて育成できるものではありません。本来は家庭で培われるべきことですが、動物飼育率の低さから期待することは難しいでしょう。学校ができることの一つとして取り組むことが急務かもしれませんね。

